

旅  
人

王  
岩



目次

漢俳・漢詩	189
新年	177
冬	147
秋	109
夏	63
春	9
はしがき	5

旅 人

俳句・漢俳・漢詩集

王 岩



はしがき

ここに集めた俳句は、私が来日後詠み、角川版『世界大歳時記』・俳句誌『獐』・『耕』・『あを』・『天頂』に発表したものである。全体を俳句編と漢俳・漢詩編とに分ち、俳句は春・夏・秋・冬・新年の四季別に配列し、末尾に漢俳・漢詩を付載し、新しい可能性を追求した。与謝蕪村に魅せられて日本に来たが、その蕪村の世界をより深く理解することができるように、蕪村研究家の清水孝之先生に薦められて、俳句の実作を本格的に始めた。日本の折々の感受を、俳句という器に託して記録し表現してきた。勿論、一時帰国の時にも、韓国へ国際シンポジウムで出かけた時にも、その旅の空における感動も、俳句という媒体を借りて伝達することを試みた。日本語を学習し、蕪村に出会い、俳句を詠めるようになってよかったですと実感している。

日本語で俳句を詠んだ最初の中国人は羅蘇山人（二八八一〜一九〇二年三月二十四日）である。彼の本名は羅朝斌で、別号は臥雲・聴秋・南国などあり、一八九九年に正岡子規の門下となり、子規庵に出入りした唯一の外国人であった。羅蘇山人は二十一歳の短い生涯に俳句を四百余句詠み、『蘇山人句集』を遺して、師の子規より半年ほど早くこの世を去った。

### 陽炎や日本の土にかりもかり殞

蝶飛ぶや蘇山人の魂遊たまぶらんと、子規は愛弟子の早世を悼んだ。

羅蘇山人以後、一九〇五年、早稲田大学に留学した葛祖蘭（二八八七〜一九八七）も、日本語で俳句を詠み、生涯に九〇〇余句を詠み残して、『祖蘭俳存』という句集がある。かかる先達に見習い、切磋琢磨して、さらに俳句に精進していきたい。

ここに、二〇〇八北京オリンピックを記念して、自らの姿をも省みる必要を感じ、中日文化交流のために、ささやかながらも、第一句集を編んだ所以である。

梅挿すや清貧に処す反古の中  
貴妃酔ひし夢路の笑みや牡丹花  
張翰の恋ひし鱸や夢の中  
故郷の夢には成らぬ炬燵哉  
地図持たぬ旅人迎ふ初日かな

二〇〇八年八月八日

王岩

春

一九九三年四月十日夕方、広州から香港を経由  
で名古屋空港に到着した折の日本印象 二句

降り立ちて見ゆる限りの朧かな

見渡せば人も桜も模糊として

中国に居たとき、『与謝蕪村の鑑賞と批評』という本で、著者の清水孝之先生の存在を知り、一九八八年十一月から先生との文通が始まった。来日後、清水先生の警咳に二回接することができた。私が日本に着いて一ヶ月ほどした一九九三年五月十五日の午後、岡崎在住の先生を初めてお訪ねした。先生は異国から来た無名で一介の学徒である私を暖かく迎えて下さった。病身の清水先生は学者としての真摯な眼差しが大変印象的な方であった。先生が自らたててくださった抹茶は青々として、その清々しい香りが心に染み渡り、初めて口にした抹茶の味わい深い美味しさが今も忘れられない。

初対面にもかかわらず、先生は三浦樗良の絵画などを和室の壁に掛けて見せてくださりながら、「蕪村のみでなく晁台とともに樗良も読んでください」と言われた。

辞去する時、『追跡・三浦樗良』の本と、寸志と書いた封筒とを渡してくださったのである。金銭のことは強く固辞したが、先生のお気持ちも強いものだったので、結局恭しく戴いた。その後も、日本の生活に慣れない私のことを心配くださったのであろう、お葉書を何通か下さったりした。先生の優しいお心配りが身に沁みている。その年の十月に、奨学金の推薦書を書いていただき、次年度のロータリーの米山奨学金を受けることができた。その推

薦書は清水先生から頂いた最後の筆跡となり、そのコピーは今も大切に保存していて、怠けがちな私の励みとなっている。

翌年の五月九日、御遺族からのお葉書で、先生が三月一日に逝去されたと知った。三、四月は丁度最初の下宿は期限が切れて、引越さなければならぬ時期であった。次の下宿先を探したり引越したりして落ち着かない毎日であった。丁度その頃、私は清水先生の夢を一回見た。中国の故郷のどこかの十字路のような場所で、自転車を押して歩いて来られた先生の夢を見た。吃驚して声を掛けたが、先生はただ無言のまま自転車で乗って遠くへ行ってしまう。今、思えば、私のことを心配なさっている先生が夢に託して私に最後のお別れを告げに来られたのではないか。思い出が走馬灯のように浮んでくる。敬愛する清水孝之先生を悼み三句を詠む。

師な逝きそひたむきに鳴くこの雉子

白雲の動かで垂れて梅匂ふ

切れ風の暮れゆく空に消えかかる

梅挿すや清貧に処す反古の中

桃源郷

山里の犬吠えてゐる桃の花



半日はんじつの閑を得たるや花の下

長閑さやそゞろ歩きの人ひとり

盃を李白と奪ふ春夜かな

花間一壺酒

花の下酒樽転ぶ一人かな

清明や音なき雨の降りしきり

春の夢覚めて瞼の重たげに

二人して酒酌みあえば花吹雪

そよ風や着物の君に枝垂れ梅

鉄くろがねの幹より散りし梅の花

子は二人戯れ合うて花吹雪

凧揚げて我らの夢は青空へ

月朧ほろ酔ひ機嫌の帰る人

春一番乱れし髪の匂やかに

暮れなずむ空の彼方に風一つ

佐保姫の足音近き野山かな

うたた寝の胡蝶飛ぶ夢うつつかな

尺八やはらはらと散る夕桜

川端の柳の萌えし小雨かな

花の香やインク芳ばしき俳諧書

紅梅や中華の心ここにあり

枝垂れ梅夢二の美人見えにけり

春雨や相合傘の過ぎし路地

夢中吟 三句

花盛りよき人に逢ふ夕べかな

よき人と夜桜を見らうれしさよ

桜狩あの子はすねて  
弥綺麗

漁火や遠<sup>おち</sup>近<sup>こち</sup>  
ゆるゝ鐘霞む

飛燕草むかし趙家の娘かな

桃源郷

鶏<sup>にわとり</sup>の鳴き声ひゞく  
山の春

懐かしき小家の梅の咲き染めり

畑焼の煙の立ちぬ野山かな

北野天満宮の境内にて

咲き染めし北野の梅の匂ひかな

京都鴨川の畔にて

鴨の知る鴨川の水温みたる



船岡山からの眺望

船岡や霞みの中の京の町

春闘や兵<sup>つはもの</sup>どもの労働者

なよやかに深窓出れば梅の花

草霞み途絶えつ見えつ径かな

八重桜一夜の雨に散りにけり

春の風天安門に登りけり

天壇や風揚げの子の笑ひ声

兒とともに長城に立ち風光る

梨花一枝春帯雨

雨過ぎるそのおもかげや梨の花

春景

耕や大地の匂ひ嗅ぎながら

凍て緩む大地匂へる故山かな

閨怨

花すぎてふられし女ひとの恨みかな

客去りて落花狼籍雨のち

紅塵

ネオン滲む巷の上や月おぼろ

雨ぬれてそのまま散りし椿かな

紅椿雨受けながら散りにけり

海棠や半開き好し雨ののち

雨濡れて草芳しき径かな

父の墓参り 三句

故郷の二月や父の墓参り

春雪の粧ひし父の墓白き

言葉なき涙の熱さ雪解し

春信

目にうれし梢の上に春来たり

即景

音のなく小雨の降るや糸桜

悠然と暖簾くゞるや杏花村

二〇〇三年の春、来日十年。賈島の「客舍并州已十霜、  
歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水、却指并州是故鄉」の  
詩句を思い出せば

他郷をば故郷と看做す春時雨

北京

懐かしき柳絮の街に戻りけり

柳絮飛ぶ北京の空の青さかな

北京にて

春宵の盃を重ねてみやこ人

北京で新疆維吾爾自治区歌舞団の演出を見る

ウイグルの踊り子春夜かがやかす

北京一の繁華街王府井漫步 二句

雑踏の王府井の春暑し

夏隣沸き出にける国訛

頤和園 二句

万寿山や湖面にゆらぐ柳影



柳揺れて湖の一山消えにけり

沈思

春の草円明園の廢墟かな

北京の友人に分かる

再見ツァイ  
チエンの言の葉熱き春名残

故郷の春泥を踏む心地かな

漢詩の境地

酔ひどれを扶けて帰る社日かな

音楽家 喜多郎氏に逢う 二句

花盛り生演奏の「絹の道」

花の宴誼を結ぶ初対面

永き日や遠く聞ゆる童歌

一人して春しゅん風ふう領す町外れ

春一番白きうなじの乱れ髪

若妻や隣家に咲ける桃の花

年々に咲けど異なる桜哉

春 濤 の 漲 る 力 空 濡 れ て

悠 然 と 手 枕 に 寝 る く れ の 春

行 く 春 や ほ ろ 酔 ひ 機 嫌 の 肘 枕

心泰自寧是歸処、故郷何独在長安。

ま ど ろ ろ み て 夢 か う つ つ か 胡 蝶 舞 ふ

冴返る富嶽を隠す雲深し

咲いて散る心の花は夢である

頑張れと受験子の顔父の顔

二〇〇八年春 息子の大学入試 五句

受験子の後姿や朝日影

黄昏れて一人で帰る受験生

燦燦と輝く光り合格す

春光を全身に浴び雀躍す

春雨のそば降る日、岳母と妻を伴って唐招提寺を訪ふ

梅白し和上の結ぶ誼かな

春雨や和上を偲ぶ故郷の人

花匂ふ小雨の中の拌みかな

花の雨和上の遺徳偲びけり

中国揚州の瓊花は御影堂の庭に植う

故郷の瓊花にほへる御影堂

雨濡れつ御影堂ゆかし春霞

夏



日本の祭り

勇  
み  
肌  
祭  
太  
鼓  
の  
男  
哉

二〇〇五年七月二八日夜、名古屋の「鳥吟」という料理屋にて、ヨーヨー・マさんに逢う。二句

二一ハオの母国語涼し語り合ふ

短夜や話せば嬉し中国語

帰省子の身のあとにつく心地かな

故郷の山とも見えて雲の峰

降り止まぬ一夜の雨や竹婦人

風生まれ黄昏時の青簾

西見れば入り日に染まる夏の空

蝉の鳴く牛寝るそばに鶏一羽

悲しさや消え入りにける遠花火

うれしさよ三畳一間のたかむしろ

人見えで蝉鳴き立てる真昼かな

父の日や父との写真を飾りけり

兒とともに潮焼けされて父笑ふ

雨過ぎて名もなき川の鴛鴦涼し

さゞめ言尽きなむとする青時雨

雲の峰崩れて雨となりにけり

五月雨や畳の匂ひ幽かなり

ひとすぢの煙の立ちし夏木立

紅牡丹夢路の貴妃の酔ふごとし

貴妃酔ひし夢路の笑みや牡丹花

梧桐や黄昏時の通り雨

図書館の開館を待つ風薫る

浴衣着る後ろ姿の色香かな

紫陽花や濡れ色滲む雨の中

来てみたり夏雲白き伊賀の国

芭蕉を憶ふ

夏雲や旅行く芭蕉にさも似たり

短夜の黄河の水の夢に來し

窓あけて顔を出したり風薫る

青時雨眠れぬ夜の一人酒



乱れ髪ほのかに匂ふ御滝なり

蚊帳ありし昔の夜ぞ懐かしき

夜振火や昔の日々を思はせり

浴衣着るあの子も無心に踊りけり

宵の口わが子を連れて蛍狩

白壁や若葉の上の城高し

萍うきくさの水面に暮るゝ時刻かな

静けさや風鈴の鳴る昼下が

故郷や夕焼け空のまた彼方

一九九七年七月一日 祝香港返還 二句

七月や一日ほどの好き日なし

七月の香港は弥香ばしき

羅うすものやほんのり貴妃の色香なり

君の名を浜辺に刻む夏休み

誰かゐて煙の立ちし夏木立

休日

子とともに裸身になりし休みの日

沖縄の印象 二句

芭蕉布をまとひし女ひとの淑やかさ

天に向け獅子吠ゆる日の盛り

夢裡の父

夢に来る父の涙や明易し

W杯を見る

風熱し太陽を追ふ男たち

名古屋大学の東山キャンパスに郁達夫の文学碑あり

さつき雨「沈淪」の碑を濡らしけり

帰省子やいろんな顔をしてみたり

帰省子のうしろ姿を遠く見る

子供の頃の記憶

向日葵の道のり遠き家路かな

雲海や突き抜けて立つ富士ひとつ

ふり返る日傘の白さ愁ひけり

京都旅情

芍薬のほへるごとき京言葉

祇園漫歩 二句

すれ違ふ舞妓のあとの風薫る

羅うすものの人すれ違ふ祇園かな

詩仙堂にて

丈山の詩魂か杜鵑花満開す

鴨川や一人で歩く夏の霜

琵琶弾ける人深くゐる青簾

一人して緑雨を聞くや京の宿



番傘や緑雨の中の先斗町

京都一乗寺近くの金福寺に芭蕉庵と蕪村墓があり、来日後、  
二回訪れた。一回目は秋、二回目は若葉の美しい初夏

夏木立風雅を秘める金福寺

琴の音や誰やら弾ける青簾

父の日や終日の雨父あらず

夜空いと高く見えたる遠花火

田舎道いよいよ遠し蝉時雨

秋近し長春すでに寒からん

北京の母 三句

夏ばてを知らぬ母ゐる嬉しさよ

白服の母長城になびきをり

バナナ買って母を見送る北京駅

青春の歌声遠き花火かな

行水のにほへるほどの色香かな

一九四五年八月六日、アメリカは原子爆弾を広島に投下す

広島や八月六日癒えぬ傷

毛井公子画展を見る

王朝の物の哀れや青時雨

ぼうたんや豊かに活ける瓶の中

一日が夢の如しよ夕端居

二〇〇八年五月十二日十四時二十八分、中国四川省汶川  
県を震源としたマグニチュード8の大地震が発生した。一  
瞬間、数万人もの尊い生命は失い、家屋などの被害は計り  
知れないほど甚大である。多くの中学校・小学校の生徒、  
幼稚園の園児は瓦礫の下敷きになった。 八句

中国や涙の五月十二日

家破れ中国は在る山若葉

漲らふ若葉の命瓦礫より

震災よお前に勝つぞ牡丹咲く

廃墟にも青葉若葉の光あり

白薔薇や主失ひしランドセル

泣くなよと齒を食いしぼる薔薇の雨

秋

緋牡丹や脆き命もまた強し

轡<sup>くつわ</sup>  
虫<sup>むし</sup>  
夢  
路  
の  
故<sup>こ</sup>  
郷<sup>に</sup>  
は  
消  
え  
に  
け  
り

張  
翰  
の  
恋  
ひ  
し  
鱸  
や  
夢  
の  
中



夕景

夕空を埋め尽くしたり雁帰る

遥知兄弟登高處、遍插茱萸少一人。

故郷や高きに登る人足らず

一九九四年十月十一日、和田克司、永野仁両先生の御案内で、蕪村の故郷を初めて訪ねた折の印象。二句

淀川や帆影の見えるで秋高し

雲飛ぶや堤長うして水澄めり

京都金福寺の秋景色 二句

路地尽きてお寺の見える紅葉かな

美しや紅葉一木翠微の中

即景

風立ちぬ芒の中を日の落ちる

仰ぐなり玉兔の泳ぐ夜空かな

あす知らず咲き誇りたる木槿花

星月夜遠くを火影露天風呂

大文字の燃え立ちぬべし中空に

足音のさ霧の深き路地よりす

燃え尽きて鮮やかに散る紅葉哉

菊花の品格

みな枯れしその中を咲く菊一つ

奈良 六句

夕映えの紅葉の中を伽藍立つ

寺遠鐘声帯夕陽

入相のもみじを撞きし法隆寺

野の薄遠くの寺は暮れかかる

大和路の花野や暮れて寺の鐘

柿買って法隆寺より帰りけり

暮れ残る公園を鹿遊びある

葉掘る人はいずこに山深し

子供の頃の記憶

月清し母に寄り合ふ帰り道

韓國中央大學校を訪う 二句

ソウル校舎にて 孫順玉教授に逢う

爽やかに語らひ合ふや初対面

安城校舎

学舎の奥行深し紅葉道

故郷や虫の音聞けば聞くほどに

故郷の秋に驚くおふくろよ

獨在異郷為異客

寂しさや他郷たきやうの虫のまた鳴きし

黄落こうらくのさ中を歩く我一人

閨怨

芙蓉なき鏡を恨む女かな

遊子吟

旅の空思はれる身の月見かな

側らに子の寝顔ある夜食かな

月出でて葎の宿を訪ひにけり



月天心異国の町を彷徨ひし

鏡見る顔かんばせ老いし芙蓉かな

影細く落としてゐたる案山子かな

秋風や目に見えてゐる草のゆれ

故郷の鱸を思ふ心かな

安城市丈山苑にて 二句

青空や柿鈴生りの一樹立つ

せせらぎや径こみちのくねる秋うらら

天心に近き玉兔の寂として

窓越しの夜空の月に語る人

敗荷を打つ雨止まらず  
終ひもすがら日

古池や敗蓮を打つ雨の音

吉林省暉南県瑪珥湖山莊にて 三句

山国の空を低くす星月夜

山国や星美しき虫時雨

天の川横たふ空や目の当たり

帰郷 十四句

道端のコスモス揺らぎ我を迎ふ

懐かしきコスモスの道国近し

故郷の山澄む時の帰郷かな

身にしむや幼馴染に邂逅す

爽やかに故里の人皆親し

懐かしき故里の山澄み渡る

長白山にて

秋晴れの天池の水やエメラルド

空高し長白山は聳え立つ

雲よりも高きに登る眺めかな

峡谷や流水光る山の秋

峡谷に奇岩怪石秋高し

山高し水澄む国の川下り

故郷にて

松茸の料理に箸が進みけり

故郷を発ちし朝

母のゐる故郷を発つ秋の雨

吉林省臨江市大粟子に溥儀の行宮あり、一九四五年八月十七日、溥儀はここで三回目の退位を宣告す。二句

花木 權行宮の主 今いずこ

行宮の釣瓶落としや主何処

集安高句麗將軍塚

黙り込む將軍塚や秋の原

好太王碑

秋雲や石いし文ぶみ語る大昔



集安の中朝国境にて

国<sup>くに</sup>界<sup>ぎかい</sup> 鴨 緑 江 の 水 澄 め り

集安五女峰にて

林 間 や せ せ ら ぎ の 音 鬼 胡 桃

蝸 や 二 人 の 川 原 暮 れ て ぬ し

子 の 植 糸 し 朝 顔 今 朝 に 咲 き に け り

十一月五日、清水孝之先生の誕生日を祝ふ

色変へぬ松にわが師の似たる哉

冬

記憶の中の風景 二句

犬櫓のわが家へ急ぐ吹雪かな

柴を刈り櫓走らせる吹雪かな

古巣への帰る道なし蕪村の忌

寂寞と長<sup>ゆう</sup>庚<sup>ずり</sup>光り蕪村の忌

父の死の電報を握る寒さかな  
異国のうそ寒い冬、父の訃を知らせる電報に慟哭す 五句

幸薄き父の人生冬ばかり

父遺せしコートをまとふ時雨月

降る雪やな逝きそ父よわが父よ

木枯らしや父なき年をどう渡る

降り佇てる野原の末の寒鴉

なつかしき昔を濡るる時雨かな

寂しさや降るほどもなき初時雨

冬木立疇へ急ぐ鴉かな

漢詩の世界

君見ずや雪降る江にて舟一つ

雪降るや君行きし路地静かなる

雪降るや太郎寝てゐる家つづき

広島の小包の来し師走かな

霜焼けの息子の耳に手を添ふる

旅中

水洩や影うすくなる無人バス停

踏み分けて落葉の小径の匂ひかな

時雨るゝや傷心を酒で噛みしめて

宇治川の流れや早し冬の雨



児時を憶ふ

兄弟と二親のゐる炉辺かな

蔦枯るゝ館や昔誰の家

宇治川や源氏はいずこ冬の雨

時雨るゝや平等院の仏様

遊ぶ子の相手となるや小春空

オンドルのある国遠し父遠し

漢詩の境地

雪を釣る昔ながらの翁かな

いざ飲まん熱爛のある今宵かな

柴刈りや一人で占める小春空

雪降るや渡しに蓑と笠の人

オンドルの温もり遠くなりけり

雪降るや君の温もり夢の中

ソウルの印象 四句

太<sup>テ</sup>  
極<sup>グ</sup>  
旗<sup>キ</sup>  
翻  
る  
町  
春  
近  
し

朝  
ま  
だ  
き  
漢  
江  
の  
水  
の  
煙  
か  
な

春  
近  
し  
チ  
ヨ  
ゴ  
リ  
に  
チ  
マ  
の  
人  
笑  
ふ

ハ  
ン  
グ  
ル  
や  
円  
や  
か  
に  
聞  
く  
春  
ま  
ぢ  
か

ソウルの宿にて

オンドルの温もり嬉し夢心地

ソウルの南大門市場にて

着ぶくれて市場の路地に紛れけり

夢裡不知身是客

故郷の夢には成らぬ炬燵かな

降る雪の夜色をありく二人かな

一九八四年の冬

雪降るや長春の夜ぞ懐かしき

遠山の端まだ赤し初時雨

さよならと手を重く振る時雨かな

障子して壺中の天を遊びをり

人影の小さく見えし枯野かな

降る雪に夜風の立ちぬ山の音

暮れてゆくその中に立つ冬木影

寒灯の一つずつ消え麓村

一九九五年十一月十七日、ドナルド・キーン先生に対面す

仰ぎ見る学者の眼月冴ゆる

隙過ぐる白駒や除夜の鐘は鳴る

年の夜や夢路をたどる帰り道

西向いてただ座りたる年の宿



名古屋久屋大通公園 即景

日向ぼこしてゐる猫とホームレス

新年

一九九八年元旦

日の本の天地に満ちし淑気かな

くれなるの海より出ずる初日かな

故郷の空までかかれ初霞

春しゅん 聯れんのある門遠くなりけり

某人の御名前の一字を借りて 二句

祥よしといふ漢字はぼくの筆はじめ

好日のはじまり祥よしの初暦

水茎の跡うるはしき筆はじめ

転居後、初めての新年を迎ふ 二句

新やどの暈を照らす初日かな

燦々と光る暈の初日影

一九九九年元旦

唐土に日ノ本に満つ淑気かな

拝  
み  
た  
き  
あ  
の  
故  
郷  
の  
初  
山  
河

日本の  
元日

耳  
慣  
れ  
し  
和  
語  
淑  
や  
か  
に  
初  
景  
色

初  
湯  
出  
て  
俯  
き  
顔  
や  
貴  
妃  
の  
ご  
と

松  
飾  
る  
異  
国  
の  
町  
を  
通  
り  
け  
り

君の名を心に刻む初便り

けふの町春着の匂ふ人ばかり

初御空たゆまず進む牛歩かな

地図持たぬ旅人迎ふ初日かな

初  
参  
り  
願  
ひ  
の  
幡  
千  
本  
も  
あ  
り

漢  
俳  
・  
漢  
詩

聽友人琵琶曲、得漢俳二首（友人の琵琶曲を聴き、漢俳を二首  
得た）

1 君抱琵琶弾、  
高山流水訴郷情、  
明月幾時還。

君 琵琶を抱き弾すれば  
高山流水 郷情を訴ふ  
明月 何時か帰らん

〔俳句式意識〕

故郷の月やいかにと琵琶の音



2 高山流水聲、

琵琶弦上訴不尽、

月は故郷明。

高山流水の声

琵琶の絃上 語り尽ず

月 故郷に明るし

〔俳句式意訳〕

西の方月傾ぶきて琵琶弾ず

何日は帰年、

举杯問月月不語、

濁酒伴無眠。

何時の日にか帰る年

杯を挙げ月に問えど 月は語らず

濁り酒 是れ眠れぬ人の連れ

〔俳句式意訳〕

にぎり酒尽ききぬ望郷一人して

寂寞失郷人、

把酒常問落日影、

今夕是何辰。

寂寞たる郷を失ひし人

酒を手にし常に落日の影に問ふ

今夕は何れの辰か

〔俳句式意訳〕

寂寞と盃汲むや秋の暮

京都金福寺有芭蕉庵・蕪村墓。一九九六年秋訪此寺、得漢俳一首。（京都の金福寺に芭蕉庵・蕪村墓があり。一九九六年秋、この寺を訪れて、漢俳を一首得た。）

曲径通幽処、  
紅葉一樹点翠微、  
禅寺風流駐。

曲がった径は幽なる奥に通ず  
紅葉一樹は翠微を点ず  
禅寺に風流存す

〔俳句式意訳〕

禅寺の紅葉の小径奥深し

流水浮落花、  
秋風古道日西斜、  
遊子在天涯。

流れる水に落花浮かび  
秋風の古道に夕陽沈む  
遊子は天涯に在り

〔俳句式意訳〕

秋風や夕日つれなく遊子吟

無題

今夕何夕月嬋娟、  
獨在異域怎堪眠。  
長憶春江花月夜、  
幾度夢里回長安。

今夕は何れの夕か月 嬋娟たり  
独り異国に在り 何ぞ眠るに堪えるか  
長く春江の花月夜を憶ふ  
幾度 夢の中 長安へ帰る

游奈良

風和日麗小陽春、  
斑鳩町上訪遺塵。  
千載古刹法隆寺、  
百年過客尋夢人。

探春

芳徑徘徊探春紅、  
婉轉鶯語深淺中。  
驚見織草萋々處、  
含羞花蕾帶露濃。

日本女郎

雨中佳人撐傘行、  
未睹芳顏背影輕。  
屐踏小巷聲漸遠、  
淡々幽香一樹櫻。

無題

柳迎春風綠、  
菊当秋霜黃。  
愧無先生骨、  
嗷々覓膏梁。

奈良に遊ぶ

風は和らげ日は麗らか 小陽春なり  
斑鳩町にて遺跡を訪ふ  
千年の古刹 法隆寺  
百年の過客 夢を尋ねる人

春を探る

芳しき徑を徘徊し 春の紅を探る  
婉轉たる鶯語 深き浅きの中  
驚き見る 織草の萋々の処を  
含羞の蕾は露を帯て濃し

日本の若い女性（大和撫子）

佳人は傘差して 雨中を行く  
顔を見せて 後姿輕し  
路地を踏んだ屐の聲が遠ざかる  
淡々たる幽香 一樹の桜

柳は春風を迎えて緑に  
菊は秋霜に当れば黄色し  
恥ずべき 先生の氣骨無し  
嗷々として 膏梁を覓める

無題

扶桑為客豈忘家、  
日々望尽日西斜。  
和月櫻開朦朧影、  
雖美不是故鄉花。

無題

綠水蒼々托浮萍、  
碧柳依々護鳴鶯。  
飛花無數亂日影、  
最牽游子思鄉情。

携兒漫步天白川邊

四月正当養花天、  
携兒漫步溪水邊。  
彩蝶一双飛將去、  
小兒逐蝶笑語喧。

聴喜多郎音楽会

電子声樂奏宮商、  
日本大鼓震流荒。  
隱形魔杖手中握、  
偉哉壯哉喜多郎。

扶桑客を為し 豈に家を忘れるか  
日々 日が斜めなるのを望み尽くす  
月に和して 桜咲き朦朧たる影  
美といえども これ故郷の花ならず

緑水は蒼々として 浮く萍を浮かべ  
碧柳は依々として 囀る鶯を護る  
飛花無数 日影を乱し  
最も遊子の思郷の情を牽く

児を連れて天白川の辺を漫步す

四月は正に養花天に当り  
児を携えて 溪水の辺を漫步す  
彩蝶は一双飛び去ろうとする  
小兒は蝶を追ふて 笑い声喧し

喜太郎さんのコンサートを聞く

電子声樂 宮商を奏でる  
日本大鼓 流荒を震わせる  
形の見えぬ魔杖はその手に握られ  
偉哉壯哉 喜太郎

賀友人琵琶演奏家某君五十寿

君抱琵琶坐、  
宮調自然成。  
大弦嘈嘈響、  
小弦切切鳴。  
胸懷若木志、  
手彈中華情。  
天命今日知、  
縱橫五洲行。

琵琶演奏家の友人の五十歳を賀す

君は琵琶を抱き座れば  
宮調は自然と成る  
大絃は嘈嘈として響く  
小絃は切切として鳴る  
胸に若木の志を懷す  
手に中華の情を弾ずる  
天命は今日に知る  
縱横に五洲を行く

聽某女二胡演奏有感

誰信嫦娥月中閑、  
分明今夜降人間。  
弦上幽幽相思曲、  
心底情懷寄嬋娟。

某女の二胡演奏を聴き感じる

誰 嫦娥の月中の閑を信じる  
分明 今夜 人間に降りる  
絃上の幽々たる相思の曲  
心底の情懷は嬋娟に寄せる

憶秦娥

楊飛雪、

荏苒 春城 又六月。

又六月、

隔年有別、

情愔無絶。

可記南湖蕩清波、

四度花開花又落。

花又落、

排排楊柳、

碧碧顔色。

楊 雪を飛ばし

荏苒として 春城 又た六月

又た六月

年を隔てて 別有れど

情愔 絶ゆることなし

南湖に清波を蕩かせしを記すべし

四度 花 開き 花 又た落つ

花 又た落つ

排排たる楊柳

碧碧たる顔色

憶秦娥 王岩

和田克司 訳

清らかなる風 柳絮を飛ばす

長春市街 日々時過ぎ また六月

そして 六月 夏終り 別れの時は来りぬ

年移り 相見ることなし

真心こそ絶ゆることなし、思ひは募る

南湖の清らかなる漣に舟漕ぎし景 未だ覚ゆや否や

四年に及びし同窓の誼

四度 花開き また四度 花散りぬ

思ひありてぞ

今年も花開き また花こそ散り行け

花散りし後とても

湖畔なる彼の楊柳 立ち並び立ち並ぶ

巡り来る今年の夏の気に碧色は輝く

君の帰りを待つがごとくに



旅 人

著 者 王 岩

発行日 2008.8.8

製 本 花岡製本所

発行所 竹僊房

164-0011 東京都中野区中央 2-50-3

☎ 03-3371-4623

---

## 作者略歴

王 岩 (WANG YAN)

1961年3月12日 中華人民共和国吉林省撫松県松江河鎮  
に生まれる

1984年8月 吉林大学外国語学部日本語学科卒業

1987年8月 吉林大学大学院文学研究科日本語文  
学専攻修士課程修了

1996年3月 愛知学院大学文学研究科日本文化専攻  
修士課程修了

2002年3月 名古屋大学大学院文学研究科国文学専  
攻博士課程修了

1988年～ 前後して俳誌『獐』主宰の<sup>故</sup>高島茂先生、  
俳誌『耕』主宰の加藤耕子先生、俳誌『あ  
を』主宰の佐藤喜孝先生、俳誌『天頂』  
主宰の波戸岡旭先生から俳句の指導を  
受ける

## 現在

南山大学非常勤講師 文学博士

著書『与謝蕪村の日中比較文学的研究—その詩画における漢  
詩文の受容をめぐる—』(和泉書院)・訳書『与謝蕪村俳句  
集』(吉林人民出版社)・論文「近世俳諧と漢詩文」(金城学  
院大学論集)・「蕪村の中の芭蕉」(復本一郎責任編集『松尾  
芭蕉ワンダーランド』(沖積舎)所収)他

和漢比較文学会会員

俳人協会終身会員 (NO. 22 - 0636)

---